

研究活動委員会企画フォーラム「新若手フォーラム」

支援するもの／されるもの——やさしさと政治の社会学

対話者：栗原彬

企画者：立教大学 深田耕一郎

長野大学 相川陽一

明治学院大学 大野更紗（難病当事者）

コーディネーター： 東京大学 出口剛司

社会学（者）は現場からの〈呼びかけ〉に対し、いかにして応答しうるのか。社会学はその誕生以来、社会的現実、とりわけわれわれ社会学者のいう〈現場〉という場所からさまざまな〈呼びかけ〉にさらされてきた。それは「協同」への誘いであり、あるいは現場からの乖離に対する「批判」であり、またその権力性に対する「告発」でもあった。しかし、社会学が社会学たらんとすれば、おのずからその〈呼びかけ〉の声が発せられる〈現場〉なるものに自身の〈居場所〉を見出さざるを得ない。本セッションの課題は、支援／被支援が交差する現場から、現代社会学の可能性と限界を問い直すことにある。そしてそうした課題に取り組むにあたり、わが国の社会学において一貫して〈現場〉との対話、支援／被支援の関係構築に取り組んできたパイオニア、栗原彬氏と若手3名の社会学者との対話を企画した。

(1) 支援と調査のあいだ：受苦的経験の社会学（深田耕一郎）

受苦は、時間とともに人間に新たな変化を生み出す。とくに他者との関係性の中で、受苦の経験に対し、別様な意味が付与される。もしそれを「回復」と呼ぶことができるならば、受苦を「ないほうがいい」経験と断じることにはできるのだろうか。しかしそうした受苦者と他者、「する／される」関係の間には非対照性が生じる。栗原は、こうした関係性を「やさしさ」と「政治」という言葉で内破し、共生の関係を立ち上げようとした。本報告はそうした栗原の実践と対話しつつ、「人間にとって受苦とは何か」という問いに迫っていききたい。

(2) 栗原社会学における管理社会論の射程：「野生の社会学」の潜勢力と在所をめぐって

（相川陽一）

栗原社会学における社会運動研究は、独自の管理社会論（全般的操作可能性の上昇）と密接にかかわりながら、その変革主体をシステムの〈周辺〉に求めてきた。ただしその際、栗原は、研究者と研究対象という二分法的関係を超越べく、自他の差異を意識しつつ対等な関係を志向しつつけてきた。本報告ではそうした栗原の「野生の社会学」の実践に学びつつも、管理社会化のオルタナティブを〈周辺〉からの運動に仮託することの可能性と限界を検証し、管理社会の乗り越えをめざす際の今日的課題を明らかにしていきたい。

(3) 医療モデル／社会モデルの功罪：分断への批判の方法（大野更紗）

これまで、日本の障害当事者運動においては、医療モデルと社会モデルの二つが対峙させられてきた。しかし現在、障害当事者は多様化し、①「(健康な) 障害者」、②「(常に高度で専門的な医療を必要とする) 障害者」、③「(健康でない) (慢性疾患や特殊な困難等を抱える) 障害者」が存在している。とくに③に該当する難病者の生存の維持においては、先の医療モデルと社会モデルの双方の改良が必要とされる。本報告では、栗原との対話を通して、当事者運動が抱える問題状況の歴史的変化と今日的課題について明らかにしていきたい。